

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

世田谷の高級マンションに住む五年生の千恵は、娘を私立中学に進学させたいお母さんと、その必要はないというお父さんとの間がぎくしゃくしていることを気にしていた。夏休み直前、いきなりお父さんから下町の深川で一人暮らしをする元大工のお祖父ちゃん(エンジン)のところへ行くように言われ、二週間ほど過ごすうちに友達もでき、深川での生活になじんできた。

お父さんがやってきたのは、八月に入って、しばらくしたところだった。

「あれ、どうしたの」

驚く千恵に、まあなと言って、お父さんはエンジンの家に上がりこんだ。遠慮するふうもなく襖を何枚か開け、居間にいるエンジンと顔を合わせた。

「腹が減ってんだけど」

いきなりお父さんは訴えた。

エンジンは笑った。

「嫁に喰わせてもらえなかったのか」

「そんなところだ」

「飯なら炊いてあるぞ」

「味噌汁は？」

「冷蔵庫にある」

お父さんはお勝手に向かった。世田谷の家はキッチンだけど、エンジンの家のはお勝手。なぜって、エンジンがそう呼んでいるからだ。

「どうしたの、お父さん」

勇気を出して尋ねてみたけど、お父さんは答えてくれず、勝手に茶碗を出して、勝手に炊飯器のごはんをついで、勝手に電子レンジにかけた。そして冷蔵庫を開け、そのまま突っこんである古臭い鍋を取り出し、火にかけた。中身の味噌汁が温まってくると、匂いがお勝手に充満した。①お父さんの動きにはまったく迷いがなくて、なにがどこにあるのか、ちゃんとわかつてるみたいだった。

ああ、そうか。

ぼんやりと突っ立っているうち、ようやく気付いた。

ここはお父さんの家だったんだ。

「本当にお腹が空いてるんだよ」

あれ、なんだろう。変な感じがした。さっきと……エンジンと話してたときと、言葉や、声の調子が違う。こっちの方が、いつものお父さんだった。

お父さんはごはんを落とし、醤油をかけ、ぐちゃぐちゃと掻きまわした。そして、ずるずると口に押しこんだ。味噌汁を啜るときは、ずらずと音を立てた。唇に張り付いた、ふやふやのワカメを、箸を持ったままの手で取った。食べ方がエンジンそっくりだ。よく見れば顔も似てる。眉毛なんかそのままだった。タエさん(エンジンの知人)ちの、二匹の白猫を思い出した。親子って似るものなんだ。目の前にいるのは、お父さんじゃなくて、だいぶ若くなったエンジンだった。

家で過ごすとき、お父さんはこんな食べ方をしない。もつと上品だ。味噌汁を啜るとき、音なんか絶対に立てない。

「千恵も食べるか」

じっと見ていたら、尋ねられた。

「ううん。いらない」

「お昼はちゃんと食べたのか」

「食べた」

そうかと言って、お父さんはずると卵かけごはんを食べ、ずずと味噌汁を啜った。やっぱり変な感じだった。喋り方は家にいるときと同じなのに、食べ方はまったく違う。

どっちが本当のお父さんなんだろう。

お父さんは実に行儀悪く食事を終えた。そして汚れた食器を流し台に置くと、居間に向かった。これも変だった。家でのお父さんは、自分だけが食べたときは、ちゃんと食器を洗う。

ここにいるのは、お父さんなのか、お父さんじゃないのか――。

よくわからない存在のあとを追って、千恵も居間に戻った。エンジは、例の、擦り切れた団扇を揺らしていた。

「まだそれを使つてんのかよ」

お父さんはいきなりそう言った。いきなりばかりだった。

「ああん？」

~~~~~  
けげんそんなエンジの手から、お父さんは団扇を取り上げた。といつても、むりやりつてわけじゃなくて、エンジが手を緩めたという感じだ。

お父さんは団扇をしつくり眺めた。

「俺が中学んとき、隅田川の花火で貰つてきた奴じゃないか」

「そうだったか」

「三十年近く前だつて」

まだ使えると言つて、エンジは団扇を取り返した。

ゆらゆらと振つてゐる。

お父さんはエンジのそばに座った。胡座のかき方も、背中の丸まりグアイも、眉毛と同じように、そのままだった。お父さんじゃなくて、年寄りのエンジに、若いエンジが向かい合つてゐたみたいだった。

「千恵を引き取りにきた」

「そうか」

「オヤジには面倒かけたよ」

団扇が揺れている。エンジと、若いエンジが、わたしをどうするか話していると千恵は思う。なんにもかも勝手に決めようとしてゐる。

「今日、連れてくよ」

「ん」

「本当に面倒かけた」

エンジはゆつくり顔を上げた。いや、と言つた。

「さして面倒じゃなかったがな」

千恵は二階に駆け上がった。家が古いので、階段がギイギイと鳴いた。いや泣いた。来たばかりのころは――たった二週間前のことだけど――なんにもかも嫌だった。古い家の匂いとか、暗い階段とか、エンジのタイドとか。だけど今は、ここが自分の家みたかった。

階段を上りきると、右と左に、それぞれ襖がある。ドアじゃない。右側にある襖を開けた。手をかけるところは擦り切れてゐる。開けると千恵の部屋だった。とはいつても、自分のものは、バッグに入れて持ってきたものだけだ。

ふう――。ふう――。

それが自分の息だと気付いたのは、しばらくたってからだだった。心の中で、なにかがあばれまわっていた。いろんなものが溢れ

そうだった。だけど泣くものかと思った。

②こんなことで、わたしは泣いたりなんかしない。たった二週間、夏休みのあいだ、お祖父ちゃんに来てただけだ。そして、これから帰る。ちつともおかしいことじゃない。夏休みが終わったら、友達に言おう。お祖父ちゃんに行つてたの、案外楽しかったよって。なのに、いろんなことが浮かんできた。縁台で涼むエンジのダボシャツ(丸首のシャツ)姿とか、シゲさん(エンジの友人)の無駄話のこととか、美紀ちゃん(深川できた友達)のこととか、ぐるんぐるんとまわる大縄跳びのこととか。

ふう——。ふう——。

気持ちがオサまらないまま、そんな息ばかりが漏れた。そのうち、階段がギイギイと音を立てた。誰かが上ってくるんだ。大丈夫だとはわかつてたけど、③いちおう頬に手をやった。ちゃんと乾いていた。

「千恵」

やって来たのはお父さんだった。

「ここにいたのか」

「わたしの部屋だから」

それしか言えない。

「ここだから」

お父さんはこつちに来なさいと言って、部屋を出た。襖を開け、向かいの部屋に入った。しばらくたつてから続くと、お父さんは部屋の真ん中に立ち、室内を見まわしていた。

「ここがお父さんの部屋だったんだ。なにも変わってないんだな」

「ふうん」

すごく古臭いけど、確かにそこは男の子の部屋だった。下らないシールがいつぱい貼られた勉強机があつて、その椅子の背もたれはぐらぐらだ。ここに来たころ、一度だけ腰掛け、ひっくり返りそうになったことがある。本棚には、いつぱい本が詰まっていた。青い背の本ばかりで、千恵には難しくて読めなかった。字がやたらと小さかった。窓際にベッドが置いてあるけど、そこに近づいたことはない。埃っぽかったからだ。だいたい知らない男の子のベッドに近づくななんて嫌だった。そこでふと、気付いた。知らない男の子じゃない。お父さんのベッドだったんだ。

「お父さんはここがすごく嫌いだった。お父さんのお父さん、おまえのお祖父ちゃんのこと本心に嫌いだつた」

部屋の真ん中で、お父さんは言った。

「とにかく雑で、自分勝手に、学がなくて、テレビに出てくるスマートな父親とは全然違った。そんな家の人間であることが嫌で仕方なかった。家を出ることばかり考えて過ごしてた」

お父さんは勝手に話している。

「ここを出なくて仕方なかった。だから必死に勉強して、いい学校に入って、④シユウシヨクした。⑤ゲシユクに移ったときは、心底からほっとしたよ。なのに、この部屋は、そっくり残ってるんだな。ここにいて、お父さん、少し辛いよ」

日が傾いたのか、突然、窓から明かりが差しこんできた。その細い光の筋の中で、埃が舞っていた。

千恵はうずうずした。お父さんの言うことはわかる気もするけど、まったくわからない気もした。たぶん、お父さんは今、いろいろ考えてるんだろう。でも、それはお父さん自身のことだった。千恵のことじゃなかった。

「わたし、ここにいて」

言葉を放つてから、千恵は自分でもびっくりした。「ずっとここにいて」

「どうして」

お父さんもイガイだったみたいで、口をぽかんと開けている。

千恵は感情のまま訴えた。

⑤「わたしもお父さんが嫌いだよ。あんな家、戻りたくもないよ。見栄を張って、高いマンションなんか買っちゃってさ。お金を返すのが大変なんですよ。前にお父さんとお母さんが話してるの聞いたもん。それで夜遅くまで働いて、お母さんは近所の人とうまくやるのに高いランチとか食べに行ったりして、そんなのみつともないよ。ねえ、お父さんはそれで楽しいの。せつかく買った家なのに、日曜しかゆつくりできないじゃない。わたしはちつとも楽しくないよ。昔のお父さんと一緒だよ。早くあそこを出たいよ。わたしのことを勝手に決めようとしてるお父さんもお母さんも大嫌いだよ」

ふう——。ふう——。

「わたし、ここがいい。これから、ここで暮らす。友達もできたんだよ。大縄跳びだつて、二重跳びだつて、教えてもらえる。お父さんやお母さんというより、ずっと楽しいよ。あのね、橋を渡つてると、風が吹いてくるの。水の匂いがするし、たまに海の匂いもする。橋から叫ぶと、向こうの橋にいる友達に声が聞こえるんだよ。魚が泳いでるのだって見える。世田谷の家に戻つたて、エレベーターで上がった下がり下がりするだけじゃない。わたしはここがいい。エンジンと一緒に住む」

ギイギイと音が聞こえるのには、なんとなく気付いていた。誰かが階段を上ってきたんだ。お父さんもそつちを気にする素振りを見せた。だけど、わたしの爆発に驚き、それどころじゃないみたいだった。

直後、轟音が家中に響いた。なにかが階段を転げ落ちたのだ。

なにかつて——？

先に動いたのはお父さんの方だった。ものすごく早かった。襖を開け、階段を覗きこんだ。

「オヤジ！」

叫んだ。

続いて千恵が覗きこむと、エンジンが階段の下にうずくまっていた。

千恵も叫んだ。

「エンジン！ ねえ！ エンジン！」

いろいろあつた。全部はとも覚えてられなかった。キュウキュウ車がやって来た。うわんうわんとサイレンを鳴らしてた。近所の人が集まつてきた。もちろんシゲさんも来た。前からキュウキュウ車に乗つてみたいと思つてたけど、いざ乗つてみたら、中をカンサツする余裕なんかなかった。

「骨に異常はないですね」

レントゲンを見ながら、お医者さんは言った。⑥お父さんはふううと息を吐いた。本当に、本当に、たくさんの息だった。

「じゃあ大丈夫なんですか」

「大きな怪我ではないのは確かです。ただお年がお年ですから、簡単ではないかもしれません。お父さまはおひとりでお住まいですか」

「ええ、わたしは離れて住んでまして」

お医者さんとお父さんがそんな話をしてる最中、後ろのベッドに寝転がっていたエンジンが手招きした。

迷いつつ、千恵はそちらに向かった。

「道具箱を片付けておいてくれ」

妙なことを言われた。

「え……」

⑦「あれがあると、ばれちまうかもしれないから。階段の下に転がつてる」

「道具箱、なにに使つたの」

「投げ落とした」

「なんで」

「息子と孫娘がうだうだやってんのは好きじゃねえ。本当のこというと、俺はなんともねえんだ」

エンジは、お父さんとお医者さんの姿を横目で確認してから、痛い痛いと言っていた右膝を曲げ、足を浮かせてみせた。そして笑った。してやったりという顔だった。

ようやく、からくりの気付いた。

階段から落ちたのはエンジじゃなかったんだ。階段を何段か上ったあと、道具箱を放り投げた。それから慌ててエンジは階段の下まで行って、うずくまった。よくもまあ、そこまで頭がまわったものだ。呆れつつ、感心した。少したけ千恵も笑ってしまった。なぜか泣くような顔になってしまったけど。エンジは、口に人差し指を当てた。黙ってろってことだ。千恵は頑張って、笑い声を堪えた。

やがてお母さんがやってきた。家族全員が集まった。まるでエンジが今にも死ぬみたいだった。エンジはそんな厳粛な雰囲気の中、全員を呼び寄せた。

「俺になにかあったら、あの家は売ってくれないか」

「恐いこと言わないでください」

お母さんの顔は真つ青で、声はうわずっていた。

そんなの初めて見た。びつくりした。

「あそこは二十七坪<sup>（一坪は約三・三平方メートル）</sup>ある。角地だから、そこそこネがつくだろう。千恵の学費くらい出るはずだ。千恵の好きなところに行かせてやれ」

エンジ、と千恵は叫びたかった。学費なんて、どうでもいいよ。あんまり会えないし、仲がいいのかどうか分からないけど、エンジがこの町ですっと生きていてくれる方がいいよ。だって、ここはエンジの町なんだよ。エンジが死んだおかげで私立の中学校に行けるんなら、わたしは行かなくていいよ。どんなに強く思っても、言葉は出てこなかった。悔しくて、千恵は唇を噛んだ。そ

のうち鉄錆び臭い味が広がった。気付いたのはお母さんだった。

「どうしたの、千恵。唇を切ってるわ」

「なんでもない」

「剥けかかった唇の皮を、むりやり取ったんでしょ」

「うん」

違うけど、そういうことにした。

「どうでもいい」

大声を出したのは、お父さんだった。

「血なんかどうでもいい」

「だけど——」

「血なんか放っておけばとまる。今はそんなことを話すときじゃないだろう」

「でも——」

「うるさい。黙ってる」

お父さんがそういうランボウな言葉を使うのなんて、初めて聞いた。お母さんはびつくりしていた。千恵も同じだった。お父さんは明らかに怒っていた。お母さんと喧嘩したときとなんか比べられないくらいだった。オヤジ、とお父さんは言った。

「下らないことを気にすんな。うちの家計が面倒なのは確かだけど、俺がなんとかするんだよ。あんただって、そんな覚悟で俺や母さんを養ってきたんだろうが。千恵のことも、家のことも、俺がなんとかする。あれは俺の家なんだ」

⑧ エンジは目を丸くしていたけど、そのうち真面目な顔になった。

「できるのか」

「当たり前だ。頑張るさ」

そうか、とエンジは呟いた。いつもの、団扇を振っているときの調子だった。  
「変なことを言つて悪かつたな」

「大丈夫ですか。歩けますか」  
「きづかき」  
「氣遣つてくれるお医者さんに悪いなと思つた。立ち上がったエンジは、実にわざとらしく膝を押さえたけど、それはすべてエンジンなのだ。」

「まあ、なんとか。ただ、一カ月ばかり、誰かがいてくれると、助かるには助かりますな。ちょいとしたことを頼める相手が。いや大人じゃなくていいんだ。そんなたいそうなことは頼まないでね」

夜になったころ、エンジは家に戻つた。結局、千恵がそのまま残ることになった。エンジのグアイがよくなるまでという話だった。そう、一カ月ばかり。ちょうど夏休みが終わるまでのあいだ。

「うまくやつただろう」

家に帰ると、エンジは笑つた。

千恵も笑つた。

「完璧だよ」

⑨ 買ったばかりのチェリオ(ジュース)を、ふたりで飲んだ。  
とても甘かつた。

一カ月の深川生活は楽しかつた。すべてを覚えた。橋を覚えた。最短距離で走れるようになった。二重跳びはマスターした。みんなの大縄跳びにも、入れてと言えるようになった。勉強はまったくしなかつた。週に二回か三回、お母さんからエンジの様子をうかがう電話がかかつてきた。

「ちよつと膝が痛いみたい」

「起き上がるのが大変そう」

「だいぶよくなつてきたよ」

千恵は嘘ばかり吐いた。

「やつぱりお母さんが行こうかしら」

「大丈夫だよ。平気だよ。それにお母さんとエンジが気を遣うよ」

「ああ、確かに。千恵もそういうことがわかるようになったのね」

お母さんは黙りこんだ。いくら沈黙が続いた。千恵はシンゾウがどきどきした。やがてお母さんが言った。「塾を続けるかどうかは千恵が決めなさい。お母さん、それでいいから」

⑩ しばらくして、エンジは板塀を直した。あの道具箱から、ノコギリやらゲンノウ(大きな)やらを出し、木を切ったり、釘を打った

りした。あつという間に、ぼろぼろだった板塀は、立派になった。

「これでまあ、あと十年は平気だ」

エンジは得意気に笑つた。いつかエンジは言つていた。塀より自分の方が先にいつてしまふから直さないと。なのに、どうして直す気になつたんだろう。

やがて夏の終わりがやつてきた。千恵が世田谷に帰る日だった。エンジの膝は治つた——ということになつてた。電話してみたところ、美紀ちゃんは旅行に行つていて会えなかつた。千恵は例の壁画(美紀がかいた絵)のところに向かい、壁に描かれた切れ長の目の美紀ちゃんに言つた。

「さよなら」

またね、という言葉は足すかどうか迷つたけど口にできなかった。なぜだろう。

「さて行くか」

そう言ったエンジは、いつものダボシャツとステテコ（はだ者の下種、ズボン）ではなく、透かしの入った服と、濃紺のうこんのズボンをはいていた。エンジがそんなカツコウ13をしてるのは初めて見た。千恵はびっくりした。

「え、なんで」

千恵は尋ねたけど、ケントウ14違いの言葉が返ってきた。

いや、あるいはばつちりだったのか。

「永代橋（下町の深川と中央区との境にかかる橋）を渡りたいんだろう」

「あ、うん」

「一回くらい渡っておいてもソ15ンはないな。ありや立派なもんだ。橋の向こうも、どうせ同じ地下鉄だし」

「エンジも渡るの」

「そうさな」

エンジは、しばらくのあいだ、考える振りをした。

その気持ちは明らかなのだが。

「まあ渡ろうか」

「向こう岸に行ったことあるの」

「そりゃあるさ」

ぐずぐずしている千恵を促うながしたのは、エンジの方だった。

「忘れ物はないか」

「うん」

「じゃあ行こう」

エンジはいつもの散歩道を通った。永代通りを真まっ直すぐ歩いた方が早いのに。裏道を行き、倉庫の角を曲がった。自然と千恵の足取りは遅くなった。少し歩くごとに、エンジは待っていてくれた。

「いつでも来られる」

エンジは言った。

「シゲが調べてくれたんだ」

「え、なにを」

「清澄白河駅（きよすみしろがわえき）なら一本だ」

千恵の住む世田谷と、エンジの住む深川は、直通電車がある。地上線と地下鉄だけど、繋がつながっているのだ。

「そうだね」

なぜ、そのとき、胸が痛くなったんだろうか。

「すぐだよね」

やがて永代橋にたどり着いた。太陽はビルの向こうに沈しずんで、その輪郭りんかくだけが光っていた。

橋の手前で、エンジは立ち止まった。

「行こうか」

「うん」

「渡るぞ」

なかなか歩き出さない。しかし最初の一步が伸のびると、あとはスムーズだった。いつしか、千恵はエンジと手を繋いでいた。エンジの手は大きくて、ごつごつしていた。硬かたかった。

「手、硬い」

そう言うと、エンジは笑った。誇ほこらしげだった。

「職人だからな」

空いている右手で、千恵は永代橋の欄干らんかんにさわり触つてみた。たくさんのでこぼこがあつて——リベットというのだとエンジが教えてくれた——それに触れるたび、頭ではなく、手のひらが膨らみを記憶きおくしていった。この感触は、ずっと残る。そう思った。頭で覚えたことは忘れてしまふかもしれないけど、体で覚えたことは決して忘れないだろう。

「気が向いたら来い」

「うん」

「気が向かなかつたら来なくていい」

「うん」

エンジは少し、躊躇ためらつた。言葉が残っているのがわかつた。

迷つた末、千恵は尋ねた。

「なに」

エンジはしばらく答えず、ただ橋を渡つた。永代橋はぐんと天に向かつて延びていた。とてもきれいだと思つた。どこまでもどこまでも登つていけそうだ。向こう岸のビルは、ちらほらと光を灯ともしはじめていた。まるでキャンドルろうそくのようだった。これから、わたしはあそこに行くのだ。

「俺はずっとここにいる」

エンジは言つた。

千恵は頷うなずいた。

「うん」

どうしたつて他の言葉は出てこなかつた。エンジと手を繋いだまま、千恵は永代橋を渡つた。

ビルがぴかぴか光つていた。

風が吹いた。

海の匂いがした。

⑪ 千恵はエンジの手を、強く、強く、握にぎりしめた。

【橋本紡「永代橋」『橋をめぐる いくつかのきみへ、いくつかのぼくへ』〈文藝春秋刊〉所収〕より】

問1 —— 線部1～15のカタカナの部分に漢字に直しなさい。

問2 —— 線部①「お父さんの動きにはまったく迷いがなくて、なにがどこにあるのか、ちゃんとわかつてるみたいだった」(3ページ)とありますが、それはなぜですか。二十字以内で説明しなさい。

問3 〰〰線部a「けげんそうな」(4ページ)・b「してやったりという顔」(10ページ)の、ここでの意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

|   |                              |   |                     |
|---|------------------------------|---|---------------------|
| a | けげんそうな                       | b | してやったりという顔          |
|   | ウ 怒 <small>おこ</small> つていそうな |   | ウ だました相手を軽べつするような顔  |
| イ | ふしぎそうな                       | エ | やつてしまったというばつの悪い顔    |
|   | ア ふゆかいそうな                    |   | オ うまくやりとげたという得意そうな顔 |
| エ | 確かめるような                      | オ | 思いがけないような           |
|   | オ 思いがけないような                  |   |                     |

問4 —— 線部②「こんなこと」(6ページ)とありますが、「こんなこと」とはどのようなことですか。五十字以内で説明しなさい。

問 5 — 線部③「いちおう頼に手をやった」(6ページ)とありますが、千恵がそうしたのはなぜですか。二十字以内で説明しなさい。

問 6 — 線部④「ここにいると、お父さん、少し辛いよ」(7ページ)とありますが、なぜお父さんはそう感じるのですか。五十文字以内で説明しなさい。

問 7 — 線部⑤「わたしもお父さんが嫌いだよ」(8ページ)とありますが、「わたしは」ではなく「わたしも」と表現しているのはなぜですか。二十五字以内で説明しなさい。

問 8 — 線部⑥「お父さんはふううと息を吐いた。本当に、本当に、たくさんの息だった」(9ページ)とありますが、このときのお父さんの気持ちを三十文字以内で説明しなさい。

問 9 — 線部⑦「はれちまうかもしれないからな」(9ページ)とありますが、エンジは何がばれることを心配しているのですか。三十文字以内で説明しなさい。

問 10 — 線部⑧「エンジは目を丸くしていたけど、そのうち真面目な顔になった」(11ページ)とありますが、このときのエンジの気持ちの説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 息子がいつのまにか父親らしくなっていることに感心しながらも、まだ信じ切れず疑おうとしている。  
 イ 息子の荒々しい口調にやはり血は争えないとあきれながらも、それを冷静に見つめようとしている。  
 ウ 息子が感情的にものをいう様子ががっかりしながらも、正面から向き合い相手をしようとしている。  
 エ 息子が自分の生き方を見てくれたことに感動しながらも、息子の家計を心配しようとしている。  
 オ 息子の激しい口調にこめられた強い決心に驚きながらも、それを真剣に受け止めようとしている。

問 11 — 線部⑨「とても甘かった」(12ページ)とありますが、千恵がことさらにこう感じた理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 怪我が治るまでのあいだエンジの身の回りの世話をすることをまかされ、大人あつかいされてとても誇らしく思ったから。  
 イ 夏休みの間だけでも孫の千恵と一緒にいたくて、医者までだましてくれたエンジの気持ちに照れくささを感じたから。  
 ウ エンジと協力して嘘をつくことで身勝手な両親にしかえしをすることができ、この上ない気持ちよさを感じたから。  
 エ 自分の気持ちを察して深川にいつづけられるようにしてくれたエンジとの心の結びつきを感じてうれしく思ったから。  
 オ エンジのけがをきっかけに両親との関係がなおったことで、昔仲がよかったころの家族を思い出してなつかしく思ったから。

問 12 — 線部⑩「しばらくして、エンジは板塀を直した」(13ページ)とありますが、エンジがそうしたのはどのような決心があったからですか。次の空欄にあてはまる部分を、——線部⑩より後ろの部分から探して十字で抜き出しなさい。

☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐ という決心。

問 13 — 線部⑪「千恵はエンジの手を、強く、強く、握りしめた」(17ページ)とありますが、この時の千恵の気持ちを、本文全体をふまえて七十〜九十字で説明しなさい。